

第4章

国家建設過程における理想的国民像の変化

——道徳教科書の分析を中心に——

矢野 順子

はじめに

本章の目的は、ラオス人民民主共和国が現在なお社会主義国としての看板を維持する一方、市場経済化を進めていくなかで理想とする国民像をどのように変化させてきたのかを道徳教育の側面から明らかにすることにある。

旧ソ連をはじめとする社会主義諸国では共産党が権力を奪取するとただちに党主導による社会主義建設が進められた。これらの国家において、教育制度は共産党のイデオロギー面でのヘゲモニーを確立し、党や国家の幹部たちを供給していくうえで不可欠な部分となった (Morgan [2005: 393])。社会主義革命の促進と社会主義社会建設に必要な人材の育成を目的に、ヨーロッパ、アジアを問わずすべての社会主義諸国において道徳教育 = 政治・イデオロギー教育が実施されてきた (Morgan [2005])。

ペレストロイカに代表される改革・開放の動きと、それに続く旧ソ連・東欧の社会主義システムの崩壊という1980年代後半から90年代前半にかけての著しい国際情勢の変化は、アジアを中心にわずかに残された社会主義諸国に対してさまざまな変容を迫るものとなった。資本主義諸国を無条件に悪とみなし、社会主義体制のみを善とする従来の道徳教育は新しい国際状況にはそぐわないものとなり、中国においても1949年の建国以来続いていた社会主義的道徳教育が、1978年の改革開放政策導入以後変化を遂げてきている (Lee

and Ho [2005], Cheung and Pan [2006])。こうした傾向はベトナムにおいてもみられ(出口 [2003], Doan [2005]), 「現役社会主義諸国」における道德教育の変化を分析することは、これらの国家の今後を考察するうえでも興味深い共通のテーマとなっている。

ラオスにおいても1975年以降「クンソムバット」と呼ばれる道德科目において「社会主義的な新しい人間」の育成をめざした政治思想教育が実施されていた。しかし1986年のラオス人民革命党第4回党大会においてチンタナカーン・マイが提示され新経済管理メカニズムが本格化すると、教育改革も緒に着き、1994年に発表された新カリキュラムは従来とは大きく内容が異なるものとなっていた。これは国家の経済政策や国際関係上の変化が反映したものであることは明らかであり、道德教育の変化を分析することは、ラオス国内の変化を考察するうえでも、さらに先に述べた社会主義諸国の道德教育研究に比較材料を提供するうえでも、非常に意義深いものである。しかし、ベトナムや中国とともに今や数少ない現役社会主義国であるラオスにおける道德教育の変化を通時的に分析した研究は現在のところ皆無に等しい。わずかに1994年のカリキュラム改革前後の教科書内容の変化を分析したエバンズ(G. Evans)の研究が存在するのみである。しかしエバンズも1994年以降、社会主義という用語が教科書から姿を消した点を指摘しているものの、理想とされる国民像が「社会主義的な新しい人間」から「善良な公民」⁽¹⁾へと移行した点についてはふれていない(Evans [1998])。

以上の問題意識のもとで、本章ではラオスにおける国家主導による上からの国民形成の手段である道德教育の変化を通時的に考察し、ラオス人民革命党にとって理想とされる国民像がどのような変容を遂げてきたのか、そのプロセスを明らかにすることをめざす。具体的には1975年から1994年までの社会主義教育の時代と、それ以降の新カリキュラムの時代に区分し、各時代の小学校と前期中学校レベルの教科書内容を比較分析する⁽²⁾。さらに新たな動きとして2008年以降順次出版された小学校向けのクンソムバット教科書に関しても若干の分析を行い、最新の傾向について考察を試みる。第1節におい

て「社会主義的な新しい人間」に求められる資質がどのようなものであったのかを党の文書を検討して明らかにしたうえで道徳教科書の内容を分析する。第2節では、1986年の第4回党大会から1991年の憲法発布を経て1994年の新カリキュラムに至るまでの間に理想とされる国民像が「社会主義的な新しい人間」から「善良な公民」へと完全に移行したことを確認する。そしてその背景要因として国家建設の重点が社会主義国家建設から国民国家建設へと移行したことを指摘する。第3節では新カリキュラムによって編纂された教科書を分析し、社会主義国家建設から国民国家建設へという流れが教科書内容にどのように反映されているかを考察する。そのうえで2008年度以降⁽³⁾、小学校教育において「クンソムバット」が復活したことの要因を教科書や2008年の改正教育法の内容などから考察する⁽⁴⁾。

以上の考察を行った後、結論として真の意味での社会主義体制の建設をめざしていた時代から市場経済化の時代へとシフトするなかで党の国家建設の重点も社会主義国家建設から国民国家建設へと移行していったこと、それとともに、国民形成の目標も「社会主義的な新しい人間」から「善良な公民」へと変化を遂げたことを指摘する。そしてさらに近年、急速な社会変化への脅威から社会主義教育への若干の揺り戻しの傾向がみられることなどを述べ、結びとしたい。

第1節 社会主義国家建設の時代 ——社会主義的な新しい人間——

1975年12月2日のラオス人民民主共和国建国以降、新政権は国防と国家建設という革命の二大戦略任務を掲げ⁽⁵⁾、資本主義段階を経ない社会主義への到達を目標とした社会主義国家建設にとりかかった。しかし、旧王国政府側の人々の相次ぐ国外逃亡や再教育キャンプへの送致、解放区出身のパタート・ラオ側人材の教育水準の低さなどから国家建設の担い手となる人材は著

しく不足していた。そのため、ラオス人民革命党は教育問題の解決を最優先事項とし⁽⁶⁾、1977年の第2期党中央執行委員会第4回総会（以下、第2期4中総）と翌年の第5回総会において、社会主義教育の建設を最優先に置き、ラオス全地域の民族人民すべてが新しい教育、新しい文化を享受できるようにするための政策計画が立案された（Kaysone [1979a: 2-3]）。1978年12月には革命の新時代における教育事業について党政治局拡大会議が実施され、その報告書のなかでカイソン・ポムヴィハーン党書記長（Kaysone Phomvihane）は次のように記している。

「社会主義教育を建設し、教育を最優先に置くことは、社会主義集団主体体制や社会主義的大生産の建設、社会主義的新しい文化、新しい人間の建設事業において、全党、全人民にとって最重要の任務である。これは国民の将来、われわれの党の革命任務にとって最大に重要な意味をもつ。教育事業における党の指導力を増大させることのみが、このような政策計画を実施することを可能にし、われわれの国家の改造と社会主義建設に対する、教育の利益と成果を拡大することができるのである」（Kaysone [1979a: 62]）。

教育事業における党の指導力を増大させることが社会主義国家建設にとって最重要であるとの言葉からは、党の社会主義国家建設の枠組みにぴったりとはめ込まれた形での教育建設がめざされていたことがわかる。さらに、この会議の報告書には①学校はプロレタリア独裁の道具である、②教育は党の革命方針と任務に奉仕しなければならない、③教育は生産に奉仕しなければならない、④教育は勤労人民の義務である、⑤教師は党の人間である、という、教育に関する党の5つの基本的見解が提示されていた（Kaysone [1979b: 10-23]）。このことから新生ラオス人民民主共和国にとって教育の整備は社会主義国家建設と軌を一にするものとして意図されていたということができる。

1978年当時、党ではラオスが直面する諸問題について「誰が誰に勝利するか」という、社会主義対資本主義のイデオロギー闘争に結びつけた解釈がなされていた（山田 [2005: 30]）。教育に関しても、カイソンは「教育を最優先に置くということ、これが意味するのは『誰が誰に勝利するか』という資本主義対社会主義という2つの路線間での、教育分野における戦いを遂行することである」として、社会主義教育建設の成功はイデオロギー闘争の勝利へと直結するものと考えられていた（Kaysone [1979b: 10]）。そしてカイソンが「われわれの国家で新しい世代の人間、社会主義的な新しい人間を建設したとき、われわれはすべてをもつことができるのである。それはすなわち新しい制度、新しい経済、社会主義的な新しい文化である」（Kaysone [1979b: 16]）と述べているように、その成功の鍵を握るのが「社会主義的な新しい人間」の育成であった。

国家建設の担い手となる「社会主義的な新しい人間」が育成できなければ、当然、党の理想とする新しい社会主義国家を建設することはできない。次項では、党が理想とした「社会主義的な新しい人間」とは具体的にどのような資質を備えた人物を指したのか、その内実をみていくことにしたい。

1. 社会主義的な新しい人間とは？

「新しい人間」（コン・ベープマイ）という表現は内戦時代に解放区で使用されていたクンソムバット教科書などにおいてすでに使われていたものである。革命後、「新しい人間」は「社会主義的な新しい人間」と呼ばれるようになり、その具体的な資質について前項で述べた第2期4中総において以下のような基準が決定された（Kaysone [1979a: 1]）。

「国家の主人、集団的主人としての意識をもつ労働者。愛国心をもち、社会主義への強い愛情をもち、輝かしい国際精神をもち、国民の最高の文化遺産と道徳を結合することができる。勇敢で不屈の革命精神をもち、労

働を尊重し、労働に幸せを見出し、労働を生活の理由とする。怠惰で不誠実な生活を憎み、集団の所有物を尊重し、大切にす。国の法律や集団の決まりごとを尊重する。

愛情、団結心、協力心をもち、ともに新しい生活を建設していくために、労働者同士助け合い、集団の利益と個人の利益を結合させることを知る。幸福な家庭を築くことを知り、夫婦の愛情において完全な責任をもち、子供の教育に高い責任をもつ」(Kaysone [1979a: 1-2])。

集団的主人としての意識や社会主義への愛、労働の尊重、集団の利益と個人の利益の結合や国際精神という、ベトナムの影響を受けた典型的な社会主義的要素に加え⁽⁷⁾、愛国心を身に付けたものが理想とされる「社会主義的な新しい人間」ということになるであろうか。人類に普遍的な理想であるはずの「社会主義」と「愛国心」が併記されるということは、ベトナムや中国などアジアの社会主義諸国では共通してみられるものである⁽⁸⁾。建国後のラオスにおいても救国闘争に由来する愛国心と社会主義建設は両立するものとして強調されていた。

そしてこのような人材を育成するうえで重要な科目が「クンソムバット」と呼ばれる道徳科目であった。1994年のカリキュラム改革に至るまで、小学校では全学年、中学校では2年生までクンソムバットが教えられ、前期中学3年から後期中学全学年では「政治」(カーンムアン)が、クンソムバットを継承する科目として教えられていた。次項では、1975年以降1994年のカリキュラム改革までの間に出版されたクンソムバット教科書の内容を分析し、初期の社会主義国家建設段階における国民形成について明らかにする。

2. クンソムバット教科書

1975年以降1994年のカリキュラム改革に至るまで、クンソムバットの教科書は内戦時代に解放区で使われた教科書に若干の修正を加えたものがそのま

ま用いられていた。1978年に出版された小学校準備学級向けの教科書には、道徳教育の目標として「国家と人民への愛、労働への愛、ラオス人民革命党への感謝と信頼を生徒たちに理解させること」と書かれていた。愛国と労働に加え、小学校準備学級の段階から党への感謝と信頼の醸成が教育目標に掲げられていたことから、党の一党支配の正当化と安定という政治的な意図が読みとれる（KSKT [1978a: k]）⁽⁹⁾。小学5年では「生徒がラオス人民革命民主体制の新しい人間になるうえで良い思想を学習するため、革命道徳についての原則と一般知識を示した課から成る」という表現もみられ（KSKT [1979b: k]）、道徳が「新しい人間」、すなわち「社会主義的な新しい人間」の育成をめざすものであることが明記されていた。

小・中学レベルの教科書をみてみると、各課の内容は基本的には先にみた党が規定した「社会主義的な新しい人間」の資質に沿う形で構成されている。労働や愛国、国際精神、集団主義などをテーマとした課が各学年をとおして存在し、記述のなかには「資本主義対社会主義」を「旧体制対新体制」の対立として表現したものもあった。以下、各学年に共通してみられるテーマのなかから、いくつか実際の教科書の内容をみていくことにしたい。

3. 労働

社会主義体制を建設する以上、「社会主義的な新しい人間」は第一に勤勉な労働者でなければならない。教科書にも労働をテーマにした課が低学年から高学年までさまざまなレベルで登場する。そうしたなか、1979年に旧ソ連で印刷された小学5年第2課「よく労働する」は、労働と教育の関係について当時の党の認識を明確に表した内容となっている⁽¹⁰⁾。

「私たちの新しい体制では、労働は義務であり、私たちの美しき誇りです。労働をすれば物資が得られ、生活は豊かになり、国家は美しく繁栄します。私たちが勉強することも労働です。頭脳労働だけでは十分ではなく、

肉体労働についても知らなければなりません。

学校、家族、村で私たちは、先生、両親、兄弟人民の教えにしたがって、勤勉に労働を鍛えていかなければなりません。

家族にいるときには、私たちは勤勉に働き、両親、兄弟を手伝わなければなりません。なぜなら彼らは農作業や政治の仕事で忙しいからです。

労働をとおして、私たちは新しい労働者の良さに慣れ親しみ、性質を養うことに配慮しなければなりません。それはすなわち、勤勉な精神、忍耐力、精神力であり、創造性と高い集団意識を身につけることです。

私たちは学問知識を改良して進歩させ、労働の効率を高めるために、すなわち、すばやく、よりよく、多くの効果をあげられるようにするために、学習したことを労働に応用していかなければなりません。そうすれば、学習したことを長く覚えていることができるでしょう。もし、私たちの人民民主共和国の学生が皆、力を合わせて物資生産のために一生懸命に労働すれば、学校を建設することは、社会に物資を増やすこと、『自給を追及することは、社会の主人となり、国家の主人となることである』(Haa Kum Ton Eng, Pen Chao Sangkhom Lae Pen Chao Patheet Saat) というスローガンを実践していくことになるでしょう」(KSKT [1979b: 6-8])。

「勉強をすることも労働です」という一節は、教育・学習はすべて社会主義国家建設のための経済目標の達成、すなわち増産という目標に奉仕するものでなければならないという党の方針を表したものである。「教育を最優先に」という党のスローガンは必要な技術を身に付けた労働者の育成を第一にしたものであり、頭脳労働＝学習は肉体労働、増産活動に対して即効性のあるものでなければならなかった。教科書では、両親の手伝いといった家庭内の労働から、学校での集団労働、農民や工場労働者への感謝の気持ちをもつことなど労働の価値を教える課が随所にみられ、労働＝生産＝国家建設という構図を生徒たちのなかに根付かせるような内容となっていた。さらに、小学1年第20課「労働者を愛し、感謝する」では、「労働者と

は物資の生産者であり、米を栽培する人であり、国家建設をする人です。それゆえ私たちは労働者を愛し、感謝しなければなりません」と書かれ（KSKT [1978b: 54]）、労働＝生産＝国家建設への参加は究極的には愛国心へと結びつくものであることが示唆されている。また、小学5年第1課「良く学習する」では、学習＝労働＝生産＝国家建設の構図が、アメリカ帝国主義者と傀儡を打倒し、新しいラオス国を建設していくことにつながるという内容が書かれていた（KSKT [1979b: 1-2]）。こうした内容から、道徳教科書では各生徒の学習が国防と国家建設という革命の二大戦略任務においてどのような役割を果たしていくのか、その道筋を示すものとなっていたといえることができる。

4. 愛国心

先にみた党の基準から愛国心が「社会主義的な新しい人間」にとって不可欠な要素であることは明らかである。しかし教科書においてタイトルに「愛国心」と書かれた課は多くはなく、むしろ前項にみたように「労働＝生産＝国防と国家建設」というプロセスへの参加に愛国心を見出すような形で愛国心を表現したものが主流であった。たとえば、小学1年第22課「救国米蔵を守る」では¹¹⁾、毎日、救国米蔵のネズミ退治に向かう生徒の行動が紹介され、「先生は、ブン君（生徒の名——引用者）が救国米を守るという善行をし、新体制を守ることに参加したことを褒めました。先生は、生徒たちみなが、集団の所有物を愛するなかで、ブン君の愛国心を学んでほしいと思っています」と書かれ（KSKT [1978b: 59]）、集団の所有物を愛すること＝新体制を守ること＝愛国心という関係が示されている。また中学2年第5課「故郷と国を愛する」からは愛国心の意味や愛国心と社会主義の関係について党の具体的な見解を読みとることができる。

「故郷と国家への愛とはわれわれラオス人の美しい遺産のひとつです。愛国心ゆえに、私たちの祖先は時代ごとに敵の侵略に打ち勝ってきました。

たとえば、フランス、日本、アメリカ帝国主義者を倒してきたのです。やつらの力がどんなに強くとも、私たちの人民はやつらを私たちの愛する領土から追い出してきました。故郷と国家への愛ゆえに、私たちの人民は現在、断固として、自分たちの国家が栄え、進歩していくよう、新しい体制を建設していくための、あらゆる困難を乗り越えているのです。

愛国心とは深い愛のひとつです。愛国心ゆえに私たちは国民の美しい歴史や、私たちの祖先が建設した価値ある崇拜すべき場を気にかけるのです。(そのようなもののなかには——引用者)豊かな言語や素晴らしい文学も含まれます。そしてまた、愛国心ゆえに、私たちは国家が豊かで美しく発展するよう、肉体と頭脳を使う勤労人民に配慮し、さらに勤勉で質素な生活、勇敢な犠牲の精神といった美しい道徳を守っているのです。

私たちの故郷と国家への愛は現在、さらに国際精神と強固に結びついています。それゆえに、私たちは世界の勤労人民、搾取されている人、国の独立を求めて戦っている人民を愛するのです」(KSKT [1977: 9-10])。

ここから、党の考える愛国心とは第一に、遠い祖先の時代より領土を守る戦いのなかで継承されてきたもの、すなわち祖国防衛の戦闘をつうじて培われてきたナショナリズムとすることができる。ベトナムにおいても、中国歴代王朝など外部からの侵略に対する抵抗のなかでキン族を中心としたベトナム国民が形成されたとする「愛国主義の伝統」をベトナム革命の推進力とする考えが1970年代ごろより党文書に現れていた(古田 [1995: 174])。この一節はベトナムと同様の傾向がラオスにおいても形成されていたことを表している¹²⁾。そしてこのような戦闘をとおして守るべきもの、それが国民の歴史や言語、文学、崇拜の対象となる場所などの文化的なナショナリズムに関連するもの、すなわちラオスの特殊性に関わるものであった。この引用の続きの個所では、さらに愛国心が労働者への愛、国際的な社会主義運動と連帯するとされ、社会主義的国際精神と愛国心が両立するのみならず、強固に関連するものとして描き出されている。

この後、教科書はこうした愛国心の醸成プロセスについて次のような道筋を示している。

「愛国心は、まずは自身の周りにいる人や動物を気にかける心から表現されます。すなわち、両親、兄弟、家、水田・・・親戚から勤労人民への愛、国家への愛、指導者たちへの尊敬と愛、新体制への愛へと進んでいくのです。

それゆえ、故郷や国家への愛を醸成したければ、第一に生徒たちは家、学校を愛し、それから少しずつより高度なもの、すなわち国家、人民、新体制への感情へと進んでいかなければなりません。

生徒の故郷と国家への愛は実際の活動のなかで示さなければなりません。すなわち、国民と新体制の善良な公民となるために、勤勉に学習し、労働し、実践するのです。生徒はさらに積極的に学校や地域のさまざまな活動に参加します。しかし愛国心とは自分自身の小さな村を愛することだけではありません。私たちはさらに革命の要求にしたがって行動し、われわれの国を建設し、守り、豊かで進歩した社会主義体制へと到達するように準備しなければならないのです」(KSKT [1977: 10])。

身近なものから国家へという道筋のなかで愛国心が醸成されるというのは典型的なナショナリストのレトリックといえる。生徒たちが学習し、労働し、社会主義体制への移行という至上命題に参加していくこと、そうした行為にこそ愛国心が現れるとして、ここでは「社会主義国家建設への参加=愛国心の表出」という関係がはっきりと示されている。そして「社会主義的であることが愛国的である」という、この一連の記述からも、この時点ではラオスの国民国家建設が社会主義への到達という究極の目標の下位にしっかりとめ込まれる形で進められていたといえることができる。

5. 集団主義, ラオス人民革命党への感謝, 少数民族

これまでの分析をとおして, 学習=労働=社会主義国家建設が愛国的である, という構図がクンソムバット教科書の基礎を成していたことが明らかとなった。こうした基本構造のもと, 教科書は集団への自己犠牲, 多民族人民の団結, 勤勉と節約, 党への感謝など, 「社会主義的な新しい人間」に求められる資質を, さまざまな角度から教授するための課により構成されていた。

たとえば, 小学4年第16課「ラオス人民革命党を愛し, 感謝する——ラオ・トゥンの村の新しい顔——」ではラオ・トゥン¹³⁾のある村に滞在した生徒が夜にラオ・トゥンの老人から村の現状について話を聞く場面がある。老人は生徒たちに帝国主義者の支配下にあった時代にはこの村では貧困に喘ぎ, 着るものもなかったが, 現在では十分な衣服があり, 子供と成人のための学校もできていると, 村の環境が一変したことを語り聞かせる (KSKT [1979a: 49-50])。そしてそれを聞いた生徒は「そのとおりです。現在, ラオス人民革命党は人民を率いて, アメリカ帝国主義者をラオスから追放する戦いを終えました。それゆえ両親兄弟 (ラオス人民のこと——引用者) は平和に暖かく生活することができるようになったのです」と答えている (KSKT [1979a: 51])。この場面からは, 生活水準の向上を根拠に旧体制に対する新体制の素晴らしさを強調し, 党への感謝の気持ちを生徒たちの間に芽生えさせようという意図が読みとれる。また同時に, あえて「ラオ・トゥンの村」を登場させることで, ラオ・トゥンの村であつてもわけ隔てなく発展させた, 民族平等を実践する党というイメージを伝えようという党の巧みな戦略を読みとることができる。

党の指導者に関していえば, 小・中学レベルで登場するのはもっぱらスパヌウォン (Souphanouvong) で, その他の人物に言及されることはまれであった。これは内戦期, 対外的にはスパヌウォンがラオス愛国戦線中央委員会の議長として公の場に登場し, カイソーンやヌーハック・プームサワン (Nou-

hak Phoumsavanh) が地下で党を指導していたという事情に由来するのである。王族出身でパテート・ラオの代表として国内外にその名が知れ渡っていたスパヌウォンが教科書で中心的に扱われていたというのは、1975年当時のカイソーンやヌーハックの知名度を考えても自然なことといえる。小学準備学級の教科書にも、スパヌウォンが学校を訪問した際の写真入りで、生徒たちのスパヌウォンに対する愛情を表現した詞が掲載されていた¹⁴⁾。

また、この時期の教科書に特徴的なものとして、スパイに対する警戒をうながす課が小学1年と4年の教科書にみられた。どちらも、軍や公安の場所を尋ねて来た見知らぬ人物に対して秘密を守った生徒たちの姿を模範的なものとして描いている。小学1年第25課「秘密を守る——私は知らない——」では「あなたたちは秘密を守り、新体制を壊そうとするスパイと戦いなさい」との表現もみられ(KSKT [1978b: 67])、1970年代後半に至ってもいまだ不安定で準戦時体制にあった当時の国内状況がうかがえる。

以上の教科書の分析からは、道徳教科書の学習をとおして、学習＝労働＝国防と国家建設＝愛国心という構図を生徒たちに理解させ、この構図の全過程を指導する党への信頼や感謝の念を芽生えさせようとする党の教育戦略がみてとれる。「社会主義的な新しい人間」にとって必要とされたのは理論的な学習よりも実践であり、労働をとおして国防と国家建設という革命の二大戦略任務に参加していくことであった。そしてまさにそうした行為こそが愛国的なものと考えられたのである。三大革命（生産関係革命、科学技術革命、思想文化革命）を謳い、社会主義の大生産や農業集団化といった経済政策が挫折をしながらも一応、現実の目標として設定されていた時代においてラオスの国民形成は社会主義体制の建設という至上命題に完全に追随するものとなっていた。そして国内の政治的不安定や対外的な脅威も残るなか、私的・個人的領域は否定され、「ラオス」という国家のもとにすべてを投げ出すところこそが美德とされたのであった。

しかしながら、1986年の第4回党大会においてチンタナカーン・マイが提示され、「新経済管理メカニズム」が本格化すると、こうした集団主義的社

会主義教育も変容を迫られることとなる。そうしたなか、理想とされる国民像も没個人的な「社会主義的な新しい人間」から「善良な公民」へと移行し、道徳教育の内容も劇的に変化することとなった。次節では、変化の契機となった第4回党大会から1991年の憲法公布を経て1994年の新カリキュラムへ至るまでの一連の流れのなかで「社会主義的な新しい人間」から「善良な公民」へと人材育成目標が変化していく様を描き出していく。

第2節 1994年の新カリキュラム——善良な公民——

1. 第4回党大会

ラオス研究において一般に1986年の第4回党大会といえ、チンタナカーン・マイの言葉とともに新経済管理メカニズム、市場経済化といった経済改革の側面が強調されてきた。しかし、このとき提起された5つの戦略計画のなかには「教育、役人の育成と研修、社会主義的な新しい人間の育成に関する改革計画を立てなければならない」という教育改革を指示するものも含まれていた（Kasuang Sueksaa [1987: k]）。同年、教育科学研究所が設立され（Nuannavong [2008: 6]）、翌1987年に「現在から2000年までの教育戦略」が発表されたことを考えると、第4回党大会を1994年の新カリキュラム制定へと至る動きの起点と捉えることができるだろう。もっとも、1987年の教育戦略発表の時点でもなお教育を「社会主義教育」と呼び、人材育成の目標も「社会主義的な新しい人間」であるなど、それ以前との大きな変化はみられない。しかし、以下のカイソーンの言葉からは「新しい人間」の意味が少しずつ変わり始めているのを感じとることができる¹⁵⁾。

「第4回党大会がわれわれの国家における革命の新しい拡大の起点となった。今回の党大会では経済社会開発の基本方針と任務を決定したが、こ

のなかには教育の方針と目標も含まれていた。これらのことは、われわれに思考、思索、問題の見方、教育事業の進め方において刷新を迫るものである。それゆえ、われわれはそのような教育の方針と目標を教育戦略としなければならない。正しい教育戦略をおいたとき初めて、経済社会開発のすべての任務をうまく実施することができるのである。教育に関して、思考面の刷新（Kaan Pianpaeng Mai Thaangdaan Chintanaakaan）とは、教育を現在のわれわれの国家の社会・経済状況に合致したものとすることである」（Kasuang Sueksaa [1987: 55-56]）。

「教育に関して、思考面の刷新」を、という呼びかけには、新しい経済政策の実施にはそれに適合した「新しい思考」（チンタナカーン・マイ）をもった人材の育成が不可欠であるという、党指導者たちの認識が示されている。この段階では、依然として「社会主義的な新しい人間」が人材育成の目標であったが、その内実は確実に変化しはじめていたのである。そしてその後、1994年の新カリキュラム制定へ向けた一連の流れのなかで「社会主義的な新しい人間」は「善良な公民」へと置き換えられ、現在では「社会主義的な新しい人間」という表現を公式文書でみかけることはほとんどなくなった。

たとえば、1987年に発表された「現在から2000年までの教育戦略」には5つの教育戦略目標が示されていた。その内容に関して、当時の文書では「社会主義的な新しい労働者」と書かれていたのが、2009年発行の「公民教育」中学6年（後期中学3年）の教科書のなかで「善良な公民」へと書きかえられているのを確認することができる¹⁶⁾。

「**A 普通教育改革** 社会主義普通学校を普通教育としての特徴をもつように建設していく。（中略）普通学校を国家全体や地方の社会経済制度に密着したものとす。社会主義的な新しい労働者の育成へ向けた教育の質の向上、毎年学業を修了した学生が労働と国家と地方を守り、国家を建設するための戦いへ参加できるようにする」（下線は引用者）（Kasuang Sueksaa

[1987: 10]。]

〔B 普通教育改革 普通学校を普通教育としての特徴をもつように建設していく。(中略) 普通学校を国家全体や地方の社会経済制度と密着したものとす。善良な公民の育成へ向けた教育の質の向上, 毎年学業を修了した学生が国防と国家建設に参加できるようにする〕(下線は引用者)(SVS [2009f: 3])。]

これは1987年に提示された5つの教育戦略目標のうち2つ目にあたる箇所からの抜粋で、Aが1987年当時の文書、Bが2009年の公民教科書からのものである。ほぼ同一内容の文書において、社会主義普通学校が普通学校へ、社会主義的な新しい労働者が善良な公民へと置き換えられ、「社会主義」という言葉が完全に姿を消しているのを確認することができる。さらに、「国家を建設するための戦い」が単に「国家建設」となり、「戦い」という言葉が消えていることも準戦時体制から平時の教育への移行を示すものとして印象的である。このほか、2002年発行の教育省の冊子においても、1987年の5つの教育戦略目標を紹介する箇所ですべて削除されており(Bunsoen and Chan eds. [2002: 20])、現在では教育を「社会主義教育」と呼ぶことはまったくみられなくなった¹⁷⁾。

このような変化が一体いつ生じたのか、限られた資料のなかから正確な転換点を突き止めるのは難しい。しかし1991年憲法には「善良な公民」という表現がみられることから、1991年の憲法公布をこの転換点とみるのではないかと考えられる。以下、1991年憲法の特徴とそのなかでの「善良な公民」の表現についてみていくことにしたい。

2. 1991年のラオス人民民主共和国憲法

——「善良な公民」の登場——

1991年8月15日、ラオス人民民主共和国憲法が公布され、建国から16年を

経て法治国家としての国家建設が開始されることとなった。「これまで、われわれラオス人民はともに国防と国家建設という2つの戦略任務を実践し、誇るべき第1段階の成果をえた。新時代へと到達し、われわれの国家の社会生活には憲法が必要となった」との前文からも (Saphaa Pasaason Suungsut [1991])¹⁸⁾、憲法公布によって国家建設が新たな段階に入ったという党の認識が読みとれる。

憲法では、人民民主主義体制、党の主導、民主集中制など政治面での社会主義体制堅持の方針が示される一方で、建国以来強調されてきた「プロレタリア独裁」という表現は姿を消した。その代わりに「すべての国権は人民に帰属し、人民によって行使され、労働者、農民、学生、知識人を中核とした、社会の全階級の人々から構成される多民族人民の利益となるためのものである」という文言が組み込まれ (Saphaa Pasaason Suungsut [1991: 1])、人民の人民による人民のための国家であることが表明された¹⁹⁾。また前文において「われわれ国民の歴史のなかで、国家の基本法典において人民の主人権が規定されたのは今回が初めてである」と書かれているように (Saphaa Pasaason Suungsut [1991])²⁰⁾、国民主権が宣言され、第3章「公民の基本的権利と義務」には17項よりなる人権規定が盛り込まれた (Saphaa Pasaason Suungsut [1991: 8-12])²¹⁾。思想や言論の自由などの自由権に関しては法律の範囲内において保証されるという限定的なものではあったが、集団主義のもとで個人の権利を著しく制限してきた従来路線とは一線を画す内容といえる。こうした変化の背景には、東欧・ソ連の社会主義体制崩壊による社会主義諸国の人権問題への国際的な関心の高まりに対して国内の民主化要求を抑え込み、一党支配を維持しようとする党指導部の意図があったものと考えられる²²⁾。さらに経済面においては国家経済の市場経済移行を宣言し、国家による私的所有権や営業の自由の保障が規定されるなど、一見すると資本主義憲法と大差のない内容となっていた (金子 [2002: 3])。

「善良な公民」という表現が登場するのは憲法の第2章「社会経済体制」第19条であり、それは次のような文脈で用いられていた。

「国家は新しい世代の人を善良な公民へと育成していけるように教育を拡大する。教育、文化、科学の活動とは、知識水準や愛国心を高め、人民民主主義体制を愛し、全民族間の団結心を増強し、国家の主人としての意識を高めることを目標とするものである」(Saphaa Pasaason Suungsut [1991: 7])。

筆者が知る限り、教育に関する公式文書のなかで教育目標が「善良な公民」の育成とされているのはこれが初めてである²³。1987年の教育戦略発表の時点では「社会主義教育」と書かれていたのも憲法では単に「教育」となっており、「社会主義教育」という表現は一度も用いられていない。また、「社会主義的な新しい人間」の資質としてあげられていた「集団の主人権」や「社会主義への愛」といった表現も姿を消し、何よりも「労働」という言葉がみられない。しかし一方で、知識水準の向上や愛国心、人民民主主義体制への愛、民族間の団結などは以前から謳われてきたものでもあり、これだけでは「社会主義的な新しい人間」との違いがはっきりしない。実際、憲法公布後、1991年10月に発表された『ラオス人民民主共和国における普通教育学校建設の目的と計画』においても「生徒は新しい労働者としての基礎的な性格を身につけなければならない」(下線は引用者)との表現が依然として使われており(Kasuang Sueksaa Lae Kila [1991: 4])、この時点では新しい人材育成の方針が完全には定まっていなかったことがうかがえる。

しかし、憲法発布から3年後の1994年に新カリキュラムが発表され、その後新しいカリキュラムに沿った教科書の編纂が進むと「善良な公民」が「社会主義的な新しい人間」に完全にとって代わるようになる。次項では党が内戦時代より設定してきた教育の構成要素(道徳、知識、労働、肉体、芸術)が新カリキュラム導入によってどのように変化したのかを分析する。そして理想的国民像が変化した要因として、党の国家建設の重点が社会主義国家建設から国民国家建設へと移行したことを指摘する。

3. 社会主義国家建設から国民国家建設へ——「道德」の意味の変化——

1994年の新カリキュラムによって「クンスムバット」の名で呼ばれてきた道德科目が姿を消し、それを引き継ぐ科目として小学校では「私たちの周りの世界」（ローク・オーム・トワ・ハオ）、前・後期中学校では「公民教育」（スクサー・ボンラムアン）が設置された²⁴。「クンスムバット」が文字どおり「道德」や「倫理」を意味する言葉であったのに対し、「私たちの周りの世界」「公民教育」というより具体的でやや性格の異なる教科名が採用された。そしてそれにもなって教育内容も大きく変化することとなった。こうした変化を裏付けるものとして党が教育全体の構成要素として掲げてきた「道德、知識、労働、肉体、芸術」の5分野について言及しておく。

内戦時代から党は道德、知識、労働、肉体、芸術の5つの分野について完全な知識を身に付けた全方面に発達した人間の養成を教育全体の目標として掲げ、それぞれの分野について個別の目標を設定していた²⁵。これはすなわち、全教科の学習をとおして上記の5つの分野すべての教育目標を達成した完全な人材を育成することを目的とするものであり、「社会主義的な新しい人間」の養成に直結するものであった。1994年の新カリキュラムで科目名としての「クンスムバット」が消えても、道德（クンスムバット）を含めた5分野を教育の基礎とする方針は維持され、新カリキュラムにおいても各分野に関して個別の目標が設定されていた。しかしその内容を1974年の第2回全解放区教育大会の報告書に記されたものと比較してみると、そこには大きな違いがみられる。たとえば「道德」（クンスムバット）の分野について1974年の時点では以下のような、前述の党の規定する「社会主義的な新しい人間」の資質とほぼ一致する内容が書かれていた。

「革命の理想をもたなければならない。この理想とは、民族解放のために戦うことであり、全国で民族民主主義革命を成功させ、社会主義へと到

達することである。すなわち、国民意識と真の労働者国際精神をもち、強靱な革命精神をもち、全身全霊を込めて、断固として革命を実行し、革命に対する意識をもつ。全民族勤労人民と国家への奉仕の精神をもつ。革命の必要に応じて、自己を顧みることなく、労働し、戦う準備をする」²⁶⁾ (Kaysone [1974: 48])。

これに対して、1994年の小学校カリキュラムでは目標を知識、能力、態度に細分化したうえで、次のような項目が設定されていた²⁷⁾ (SVS [1998: 2])。

知識

国民、国家、国民の美しい遺産についての基礎知識を習得する。

国家の法律と地方の美しい伝統についての基礎知識を習得する。

学校、児童組織の規則についての基礎知識を習得する。

生徒としての道徳規準や作法、指導者の教えについての基礎知識を習得する。

家族、集団、友人との関係についての基礎知識を習得する。

能力

国歌を歌い、指導者の指示にしたがって行動することができる。

学校の規則にしたがって行動することができる。

家族の生活慣習にしたがって正しく行動することができる。

交通規則を守り、行動することができる。

友人を助けることができる。

挨拶をすることができる。

態度

故郷（祖国）とその周りの環境を愛する。

指導者、指導的職員、両親、年配者、国のために障害を負ったり犠牲となったものを尊敬する。

家族と友人のすべてを愛する。

学校と家庭において一生懸命に勉強し労働する。

ここでいう「指導者」とは学校の教師ではなく党の指導者を意味する。新カリキュラムに示された目標と1974年のそれとの最大の違いは社会主義国家建設というかつての至上命題が姿を消しているということに尽きる。そしてそれに代わって、法律や校則、交通規則についての基礎知識といった法治国家の成員として必要不可欠な知識や国歌や国民の遺産についての知識など、平時の国民形成において重要な文化ナショナリズムにかかわる側面を中心に目標が構成されている。このほか「知識」の分野でもかつては「労働し、戦い、働くのに十分な知識をもたなければならない」とされていたのが、新カリキュラムではラオス語や計算、自然環境、地理や歴史、公民の義務、人間の身体についての知識といった、いわば政治イデオロギーに左右されない普遍的な知識の習得に変化している。

こうした変化からは党の国家建設の比重が社会主義国家建設から国民国家建設へと移行していく様を読みとることができる。農業集団化など社会主義体制の建設を意図した政策に失敗し、「正統な」社会主義国家建設がもはや現実的な選択肢とはなりえなくなったとき、その代わりとして選択されたのが党の指導下での文化ナショナリズムに依拠した国民国家建設であったのであろう。そしてそれともなって「道徳」(クンスムバット)という言葉に含まれる意味自体が社会主義的価値観一色のものから国民国家建設に適したものと変化していった。「社会主義な新しい人間」から「善良な公民」への移行や道徳の教科名の変化は、このことを象徴的に示すものといえ、この事実は実際の教科書内容の分析をとおしてさらに明確なものとなる。次節では「公民教育」の教科書を中心に教科書の内容や特徴についてみていくことにしたい。

第3節 「善良な公民」と国民国家建設 ——教科書の分析から——

1. 「善良な公民」とは？

1994年の小学校カリキュラムにおいて「私たちの周りの世界」は、「自然の生物・非生物のなかで生じるさまざまな現象や進化に関する知識から社会生活についての知識に至るまで、総合的に学習」する科目とされた(SVS [1998: 51])。教科書をみると、人間の身体、植物、動物、地理など、理科と社会と道徳をひとつにまとめたような構成となっており、国家の理想とする政治的に「正しい」児童の姿を提示することに終始していたこれまでのクソムバット教科書とは性格の異なるものとなった。

一方、「公民教育」は中学1年教科書の冒頭部分において「公民教育の科目は、国の善良な公民としての、人間の生活様式についての知識を学習する科目である。この知識には、政治方針、法律規則、行政制度、哲学の知識、経済、文化、国際関係が含まれる」(下線は引用者)として(SVS [1996a: 154])、「善良な公民」の育成を目的とする科目であることが明記された。そして、「公民教育科目は社会生活を営む人間の個性を育成していくうえで非常に重要である。(中略)今日、われわれの社会は急速に変化している。われわれの党と政府は社会の要求にこたえるため、人材開発についての戦略をたてた」と述べ(SVS [1996a: 155])、党の新しい人材育成戦略における公民教育の重要性を強調している。以下に示す「公民教育」の教育目的からは「善良な公民」が身につけるべき知識がどのようなものであるのかを知ることができる。

「公民教育科目は、生徒たちが国全体の利益を知り、法律規則、国民の美しき良き伝統風習を尊重し、愛国心をもち、国家における国民の権利と義務にしたがって行動するよう、訓練することを目的とする。また、国民

一致の団結心を持ち、少数民族を愛し、助けること、国際精神を持ち、すべての国家と協力すること、勉強、労働において勤勉に努力し、祖先から継承されてきた仕事を継承する準備ができるよう、訓練することを目的とする」(SVS [1996a: 154])。

法令の尊重や国民の権利と義務の遵守など法治国家の成員として必要な知識の習得を第一に、ラオス国民としてのナショナル・アイデンティティの醸成を意識した内容が中心となっている。すなわち法治国家の成員としての権利と義務を行使し、「ラオス国民」としての愛国心を身につけたものが「善良な公民」の資質を備えたものということになるであろうか。

1990年代に入り、市場経済化の進行や冷戦終結によるイデオロギー闘争の事実上の終焉により、社会主義国家建設という唯一かつ絶対的な目標は昔日の輝きを失いつつあった。そうしたなか、政治的には社会主義を維持しつつも、それ以外の新たな統合原理を明示し、国民統合を図っていく必要が生じていた。そこで、党が新たな求心軸として設定したのが文化的なナショナリズムに依拠した国民国家建設であったのだろう。

以下、「公民教育」を中心に、教科書のなかからいくつか新カリキュラムに特徴的なテーマを抽出し、その内容を分析していくことにしたい。「私たちの周りの世界」については総合科目的な内容であるため、とくに道徳分野に関するものについて補足的にみていくことにする。

2. 道徳と仏教——国民の伝統文化としての仏教——

社会主義国家建設から国民国家建設へ、そして準戦時体制から平時へという、国家建設における比重の変化は「公民教育」の目次をみただけで一目瞭然となる。各学年の目次をみると、中学1年はⅠラオス国民(サート)、Ⅱラオス文化、Ⅲ地方行政制度、Ⅳ善良な公民としての生徒の義務、などの4章(表1)、中学2年はⅠ環境、Ⅱ国家と政治機構、Ⅲ法律についての基礎

表1 「社会科学」 中学1年（1996年）

I	ラオス国民
1	国民とは何か？
2	ラオス国民の歴史
3	ラオス国民の美しい遺産
4	ラオスの全民族
II	ラオス文化
5	法律、言語、芸術文学における文化
6	信仰と慣習における文化
7	ラオス社会における礼儀作法
III	地方行政制度
8	村の行政
9	村の行政制度
10	郡の行政
11	県、特別市の行政
12	県と特別市の行政機構
IV	善良な公民としての生徒の義務
13	家族のなかでの義務
14	家族のなかでの義務（続）
15	家族のなかで行わなければならない義務
16	教育制度と学校組織の学習
17	学校における生徒の義務
18	社会に対する善良な公民の義務
19	道路交通における義務

（出所） SVS [1996a] をもとに筆者作成。

知識、などの3章（表2）、中学3年はIラオス人民民主共和国憲法についての基礎知識、II国連についての基礎知識、III平和と人口問題、などの3章から構成されている（表3）。この構成から「公民教育」の教科書が法治国家の公民としての良識と愛国心を、また現代の国際社会に対する理解といった「善良な公民」に必要な資質を教授することを第一に作成されていたことがわかる。

クンソムバット教科書からの顕著な変化のひとつに仏教に関する課が登場したことがある。建国当初、党は仏教の弾圧こそ行わなかったものの、托鉢

表2 「社会科学」中学2年（1997年）

I	環境
1	環境の意味と種類
2	自然環境
3	文化・社会領域の環境
4	ラオスにおける環境問題解決方針
5	世界の環境危機
6	世界の環境危機の原因
7	人類の生活に対する環境危機の影響
8	世界環境問題の解決方針
II	国家と政治機構
9	国家について一般知識
10	ラオス人民民主国家
11	立法機関
12	行政機関
13	司法機関
14	ラオス人民革命党
15	ラオス建国戦線
16	ラオス労働者同盟
17	ラオス人民革命青年委員会
18	ラオス女性同盟
III	法律についての基礎知識
19	法律についての考え
20	民法
21	刑法
22	日常生活で使用する法律

（出所）SVS [1997d] をもとに筆者作成。

の禁止や仏教儀礼の縮小、僧侶にマルクス・レーニン主義の政治教育を強制するなど、事実上の仏教抑圧ともいえる措置を実施していた（菊池 [2010: 221-222]）。実際、内戦時代から党は僧侶組織をつくり、宣伝活動や識字運動に積極的に僧侶を利用していたが、クンスムバット教科書において仏教に関する課が登場することはなかった。マルクス・レーニン主義による社会主義国家建設を標榜する以上、党にとって仏教は本来否定されるべきものであった。そのため「社会主義的な新しい人間」の養成を目的とした道徳教育の

表3 「社会科学」中学3年(2008年)

I	ラオス人民民主共和国憲法についての基礎知識
1	ラオス人民民主共和国憲法とその構造
2	ラオス公民の権利と義務
3	言語, 文字, 国章, 国旗, 国家と首都
II	国連についての基礎知識
4	国連の誕生と義務
5	国連の組織構造
6	国連の活動
7	国連におけるラオスの役割
III	平和と人口問題
8	平和の重要性
9	戦争の災厄
10	平和共存
11	ラオスの平和愛好政策
12	人口と人口学
13	生活の質
14	生活の質に影響する全要素
15	ラオス人の状況

(出所) SVS [1997e] をもとに筆者作成。

なかで仏教について教授するのは不適当と考えられたのであろう。しかし、「私たちの周りの世界」「公民教育」では、ともに仏教道徳や儀礼をラオスの伝統的な文化として積極的に紹介するようになる。たとえば、「私たちの周りの世界」小学4年第44課「ラオスの文化と社会」において「敬意を表す際の礼儀作法」を紹介する箇所では、敬意を表すべき対象として指導者、教師、高位者などとともに僧侶があげられている。ここでは、僧侶にたいして合掌礼を行うこと、また高位者に対しては「カープ」と呼ばれる地面に平伏しての挨拶を行うことが写真付きで示され(SVS [1997a: 120])、社会主義国家建設と階級闘争が重視されていた時代には否定されていたような礼儀作法がラオスの伝統風習に適った方法として紹介されている²⁸⁾。

また、中学2年の第3課「文化・社会領域の環境」には道徳概念について興味深い記述がある²⁹⁾。この課では、文化・社会的領域における環境を有

形・無形の2種類にわけたうえで、無形の環境について次のように記している。

「ラオス人民の考え方、規律様式、伝統慣習、風俗習慣は道德（シントム）を基礎とするものである。

・五戒（シン）とは、すなわち不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒
 ・五善（タム）とは、すなわち、相互の思いやり、法のもとでの生活、配偶者のみを愛する、誠実、つねに仕事に対する責任感をもつ³⁰⁾

ラオス人民民主共和国の法律はすべて、これらの道德（シントム）を基礎にもつ。これこそが、我々の党と国家の本質（タート・テー）を表すものである」（傍点は引用者）（SVS [1997d: 193]）。

「シントム」とは、「クンスムバット」と同じく「道德」という意味をもつ言葉で、“シン”は仏教用語の「持戒」を“タム”は「徳、善、達磨、仏法、理」などを表す。ラオス人民革命党幹部の1人であるプーミー・ウォンウィチット（Phumi Vongvichit）は、『新しい道德（クンスムバット）と革命道德（シントム・パティワット）』のなかで、「クンスムバット」を人間の内面にある善、「シントム」を万人が受け入れることのできる正義と説明している（Phumi [1995: k]）³¹⁾。そしてさらに、五戒に代表される昔からの仏教的な「道德」（シントム）に対し、レーニン、毛沢東、ホーチミン、カイソーンらによって新しく作られた「革命の道德」（シントム・パティワット）をあげ、この2つを明確に区別している³²⁾。

ここで興味深いのは、「五戒」や「五善」といった仏教道德（シントム）がラオスの法律の基礎を成し、そしてそのことが党と国家の本質（タート・テー）を表すとされている点である。プーミーは、その著作において、ラオス人民革命党は仏教道德とマルクス・レーニン理論にもとづく革命道德の両方を党員の教育のために用いてきたとしている（Phumi [1995: 8]）。しかし、内戦時代から強調されてきたのはもっぱら革命道德の方であり、クンスムバ

ットの教科書においても「革命道徳」という表現は幾度となく登場している。これに対して五戒や五善がクンスムバットの教科書に登場することは一度もなかった。このような変化からは、国民国家建設に重点を置くにあたり仏教をラオス国民の伝統的な文化として国民形成の中軸に据えていこうとする、党の戦略が読みとれる。中学1年の第6課「信仰と慣習における文化」においても「14世紀以降、仏教は国民の宗教となった」「仏教道徳はラオス人の心情に深い影響を及ぼした。寺院はラオス国の文化の中心である」と記され(SVS [1996a: 168])、ランサーン王国時代から現在に至るまでのラオス国民の伝統的な文化の中心に仏教を据えている。

仏教は主要民族であるラオ族の大半が信仰し王国政府時代は国教でもあった。そのため仏教を利用しての国民形成はラオ族の人々の間においては効果的な手段であったといえる。しかし一方で、国内には仏教を信仰しない少数民族も存在しており、仏教を強調するだけでは国民統合の求心軸として十分ではない。この問題に関して、新教科書のもうひとつの特徴として少数民族に関する記述内容の変化をあげることができる。党は内戦時代より諸民族の平等と団結を強調してきており、クンスムバット教科書においてもそれが重要なテーマとして扱われ各学年で教えられていた。しかしその内容はもっぱら社会主義国家建設や救国闘争における団結であり、各民族の伝統風習や歴史について詳しく言及したものはみられなかった。次項では「ラオス国民」と少数民族の関係について新教科書においてどのように扱われていたのかみていくことにしたい。

3. 少数民族の統合——愛国心の遺産と文化遺産——

中学1年教科書の第I章第1課が「国民とは何か?」というタイトルではじまることは、社会主義国家建設から国民国家建設へという党の国家建設戦略の移行を象徴的に示すものといえる。第I章は、全体が1. 国民とは何か? 2. ラオス国民の歴史, 3. ラオス国民の美しい遺産, 4.

ラオスの全民族、の4課から成り、各民族が「国民の歴史」のなかでいかに関わり合い、ラオス国民として形成されてきたのかを生徒たちに理解させることで国民統合の促進を図る内容となっている。

第1課「国民とは何か?」と第2課「ラオス国民の歴史」ではラオス国民の起源を中国雲南の古代民族哀牢（アイラオ）にさかのぼり³³、そこから南下したラオ族によるランサーン王国建国、フランスによる植民地支配、民族民主主義革命を経て現在に至るまでの「ラオス国民の歴史」が描き出される³⁴。このなかで少数民族が登場するのは「フランスの植民地支配下のラオス国民」の箇所であり、「愛国的なラオス国民は屈することなく、ポー・カドゥアト、オンケオ、コマダム、チャオファー・パッチャイらラオスの祖先たちのもとに救国闘争を展開した」との記述がみられる（SVS [1996a: 160]）。オンケオ、コマダム、チャオファー・パッチャイはフランス植民地権力に対する抵抗闘争を指導した少数民族の指導者たちであり³⁵、ここでは祖国防衛のために戦った「愛国的なラオス国民」として紹介されている。また第3課「ラオス国民の美しい遺産」では、こうした外敵の侵略に対する戦いのなかで培われた愛国心を「国民の遺産」とし（SVS [1996a: 162]）³⁶、独立と自由を求めた戦いのなかで多民族から成るラオス国民が形成されたとして、ラオス国民の存在に歴史的な正当性を与えている。

もっとも、第1節の4. で述べたように、祖国防衛の戦いのなかで国民形成がなされてきたとの歴史観はクンソムバット教科書においてもみられ、これ自体は格別新しい内容というわけではない。しかしここで興味深いのは、この戦いの行き着く先が社会主義国家建設ではなくなっていることである。そのことを示すものとして、第2課「ラオス国民の歴史」の最後の項目である「国家建設の時代のラオス国民」に次のような記述がみられる。

「1980年代末、党と政府は刷新政策を開始した。国家による調整を加えた市場経済システムの導入を宣言し、そして相互利益と平和原則にもとづいた全方位外交へと乗り出した。1991年のラオス人民民主共和国憲法では、

すべてのラオス国民に国家の真の主人としての自由権を保障した。

現在、すべてのラオス人は、国家を豊かで、強固で、人々が快適に暮らせるように建設していくため、全力で汗を流して任務を遂行している」(SVS [1996a: 161])。

かつての、学習＝労働＝社会主義国家建設という構図がここではもはやみられない。強力で豊かな国家建設という目標は、この教科書が出版されたのと同じ1996年3月に開かれた第6回党大会で2020年までの最貧国脱却という国家目標が掲げられたのを反映したものとも考えられる。このことは社会主義国家建設から貧困脱却へという国家建設における優先順位の変化をうかがわせる。

一方、少数民族に関する新教科書の新しさは、各民族の伝統風習について詳細な内容が盛り込まれたことにある。中学1年第4課「ラオスの全民族」ではラオスの全民族をラオ・ルム、ラオ・トゥン、ラオ・スーンに3分割したうえで、それぞれのグループにどの民族が含まれるのか、彼らがどのような特徴をもつのかを解説している。

ラオ・ルムの特徴としては、水田耕作や仏教の記述とともに言語と文字が憲法で公用語に規定されていることが書かれていた (SVS [1996a: 164])。それに対して、ラオ・トゥンとラオ・スーンではそれぞれ以下のような説明がなされていた。

ラオ・トゥンについては、

「彼らの大半は高原や山岳地帯に居住している。トン・ハイヒンを含め、石器時代、銅器時代の文化的痕跡を多くもっている。これらのことは、彼らが何世代にもわたってラオスの領土の主人であったことを証明するものである。現在、彼らは河川の流域で他の民族と混じり合って生活している。ラオ・トゥン民族は畑作と狩猟に通じており、さまざまな収穫物を衣類や道具と交換する。精霊信仰で勇敢な闘争心をもち、他の民族と協力して、革命の時代は帝国主義者と戦い、勇敢に勝利をおさめた」(SVS [1996a:

164-165]】。

ラオ・スーンについては、

「彼らはわれわれのラオス北部の高い山の丘陵，高原の気候の涼しい地域に居住している。畑作をしてトウモロコシを栽培し，動物を飼育し，芥子の栽培に通じている。布を織り，鍛冶を行う。侵略者である帝国主義者たちに対する救国闘争において彼らは偉大なる成果をあげ，遺産を残した」(SVS [1996a: 165])。

ラオ・トゥン，ラオ・スーンともに救国闘争への貢献が強調されており，国民統合の求心軸として「愛国心の遺産」が最重要なものとして位置づけられていることがわかる。しかしここで注目したいのは，とくにラオ・トゥンの記述において彼らがラオスの先住民であることを明記し，その根拠にトン・ハイヒンなどの歴史遺跡をあげていることである。トン・ハイヒンとはラオス北部シェンクアン県の別名ジャール平原と呼ばれる巨大な石壺群のある平原のことで，現在，ラオス第3の世界遺産としての登録をめざしている。第3課「国民の美しい遺産」では，先にみた「愛国心の遺産」とともに「勤勉な労働と創意工夫の才という遺産」をラオス国民の遺産としており，その根拠として「我々の祖先は2つとして同じ物のない，国民の独自性（アイデンティティ）である建造物や芸術をつくってきた。たとえば，ハイヒン，ワット・プー，タート・ルワン，ワット・シェントーン・・・」と，歴史的建造物をあげている (SVS [1996a: 163])⁹⁷⁾。「愛国心の遺産」としての歴史記述において少数民族が登場するのはせいぜいフランス植民地時代以降のことであった。それに対して「勤勉な労働と創意工夫の才という遺産」では，タート・ルワンやワット・シェントーンとともに⁹⁸⁾，トン・ハイヒンやワット・プーを遺産目録のなかに並べることで⁹⁹⁾，少数民族を含めたラオス国民の形成をさらに遠い過去へとさかのぼることを可能としている。

このほか，第5課では少数民族の民謡や踊りの様式，第6課ではモン族の

キン・チアンやカム族のゴと呼ばれる祭儀をオオク・パンサーなどの仏教祭儀とともに、「ラオス」の伝統風習として紹介している（SVS [1996a: 167-170]）。しかし、こうして「国民文化」の枠組みのなかで積極的に少数民族の伝統風習を紹介している一方で、「言語」の項目ではラオ語についての記述しか存在しない（SVS [1996a: 166]）。これは国民文化の多様性を認めつつも、あくまでも「国民の言語」はラオ語であるとして、ラオ族中心の国民統合を図る党の姿勢を表したものといえる⁴⁰。

このように、新教科書では「愛国心」と「勤勉な労働と創意工夫の才」という2つの遺産を組み合わせることで、ラオス国民の淵源を遠い過去に求め、その多民族性を通時的に保証しようとする試みがなされていた。こうして、かつての救国闘争や社会主義国家建設における団結といった現在進行的で共時的な次元から、「歴史的遺産」という諸民族の通時的な団結が強調されるようになったこともまた、社会主義国家建設から国民国家建設へという国家建設戦略における力点の変化を示すものと考えられるだろう。

4. スローガンとしての社会主義へ

これまで再三にわたり国家建設の重点が社会主義国家建設から国民国家建設へと移行したということについて述べてきた。それでは新教科書において社会主義はどのように扱われているのだろうか。

理想的国民像が「善良な公民」へと変化し、国民国家建設に重点が置かれるようになって、教科書から「社会主義」という言葉が完全に消え去ったわけではない。登場頻度は少ないが、たとえば、中学3年第1課「ラオス人民民主共和国憲法とその構造」では、「新しい時代において、憲法は将来の社会主義建設のためのすべての基礎的な要素を建設するための重要な拠り所となった」との表現がみられる（SVS [1997e: 163]）。この記述からは、国際関係が大きく変化し市場経済化が進められても、将来の社会主義への到達という目標が放棄されたわけではないことがわかる。

しかし一方で、国防と国家建設という内戦時代から掲げられてきた「革命の二大戦略任務」には明らかな変化がみられる。たとえば、中学2年の教科書では「ラオス国民の二大戦略任務」について次のように説明されていた。

「国防とは、もっとも重要な仕事である。なぜなら、もし平和がなければ、人民の衣食住や国家建設が困難なものとなるからである。国防とは、以下のような行為に表される。国家の法律を厳守する。自立心を持ち、国家の平穏を守る。権利、人民の民主主義、国民の主権を侵すあらゆる行為に対して戦う」(SVS [1997d: 216-217])。

国防にあてはまる行為としてあげられた例をみると、法治国家の秩序維持や人権侵害に対する防御が中心で、侵略者に対する武力闘争が強調されたかつての内容とは大きく異なるものとなっている。一方、国家建設については以下のように説明されている。

「国家が貧困や困難から脱却していくために、党と政府は時代ごとに正しく適切な経済社会開発方針をとってきた。現在の経済社会開発方針は、党が指導し、国家が管理する市場経済システムへと移行することである。そしてまた、多民族ラオス人民に対して、彼らが自分の能力を生産と生活改善へと注入していくことを促し、将来、ラオス国家が豊かで強力な国家となるよう建設していくためのあらゆる条件を作り出すことである」(SVS [1997d: 217])。

ここでも、その目的が将来の社会主義達成というよりもむしろ貧困脱却に置かれている。これは先に述べた第6回党大会における「2020年までの最貧国脱却」という国家目標を反映したものであることは明らかであろう。また、市場経済への移行の理由については、中学2年の教科書のなかで「(最初は農業集団化や国有企業の拡大などをめざしたが——引用者) 国家建設開始当初の

経済レベルがあまりに低すぎたのと、世界経済との関係や条件が大いに変化したため、古いタイプの経済管理システムが不適當なものとなってしまった。それゆえ党と国家は、党が指導し国家が管理する市場経済メカニズムを利用している」と説明している（SVS [1997d: 215]）。「古いタイプの経済管理システム」が社会主義計画経済であるとすれば、社会主義経済の建設はもはや時代遅れなものであることを容認しているかのようにも読みとれる。しかし、そうであるなら当然、将来達成が目指される社会主義国家とは一体どのような体制の国家を意味するのか、という疑問が生じる。実際、先の引用箇所ですべて「将来の社会主義建設」という表現がみられるものの、その内容は曖昧で、かつてのような社会主義国家建設のための具体的な経済目標がともなうものではなかった。栗原は、ベトナムではドイモイの進展とともに、制度としての社会主義から理念としての社会主義へと社会主義の意味が変化し、社会主義という言葉が一種の修飾語として用いられるようになった、と指摘する（栗原 [2010]）。本章でみた一連の教科書内容の変化からは、ラオスにおいてもベトナムと同様のことがあてはまるということができただろう。教科書をみる限り、党は一党支配の正当性を一貫して民族民主主義革命の勝利に求めている。そうである以上、社会主義の放棄は党の支配の正当性を揺るがすことになり、たとえ「正統派」の社会主義モデルから大きく逸脱したとしても「スローガン」としての社会主義を放棄するわけにはいかないのである⁽⁴⁾。

5. 教育法と小学校におけるクンソムバットの復活

このように道徳教育から社会主義色が脱色されるなか、2000年5月にはラオス人民民主共和国で初めての教育法が施行された。第1条「教育法の任務」では「教育法には善良な公民を育成するための教育活動についてのさまざまな規定や規則、手段を決定する任務がある」とされ、「善良な公民」の育成を教育目的として掲げている（JICA [2004: 588]）。2001年には「20カ年

(2001-2020年)、10カ年(2001-2010年)の教育戦略」と「第5期教育5カ年戦略計画」が発表され、ここでも人材育成の目標は「善良な公民」とされた。しかし愛国心などとともに「社会主義の理想」をもつことが善良な公民の条件に加えられ、2000年の教育法ではみられなかった社会主義の語が使われている(Bunsoen and Chan eds. [2002: 153])。さらに7年後の2008年3月に改正教育法が施行されると、そこでも第1章第5条の6項目からなる「教育の原則」の1つ目に「教育は社会主義の方向で行われなければならない。国民的、大衆的、科学的、現代の特徴をもたなければならない」という表現がみられる(Kasuang Sueksaathikaan [2008: 4])。「社会主義の理想」「社会主義の方向」などの曖昧な表現ではあるが、2001年以降「社会主義」の語が教育分野の公式文書で使われているのを確認できる。改正教育法と同じ2008年度に初等教育でクンソムバットが再び教授科目のひとつとして復活したことを考えると、これらを教育の社会主義路線への若干の揺り戻しとみることができるかもしれない。

1994年の新カリキュラム制定から14年後、2008年度の新学期から、まずは小学校1、2年でクンソムバットが復活した。これにより「私たちの周りの世界」がなくなったわけではなく、「クンソムバット」と「私たちの周りの世界」が1冊の教科書にまとめられ、2つの科目が並存して教えられることとなった。そして翌2009年度には小学校3年と4年、2010年度には小学校5年でも開始され、小学校の全学年で「クンソムバット」の教育が再開された。それらの教科書の目次をみると、たとえば小学校4年では「環境保護」などの新しい分野とともに⁽⁴²⁾、「労働を愛する」「労働者を尊敬し、感謝する」「集団の財産を守る」、小学3年では「(革命の)指導者を尊敬する」といった、「私たちの周りの世界」には存在しなかった、かつての「クンソムバット」と類似したタイトルを発見することができる⁽⁴³⁾。

もっとも、たとえタイトルが同じでも「社会主義的な新しい人間」の育成を目指したかつてのクンソムバットと、現在のクンソムバット教科書の内容がまったく同じというわけではない。教育の目標も「生徒が社会のなかで善

良な公民として成長していけるようにすること」「生徒たちがラオス人であること、ラオス国民であることに対する誇りをもち、民主主義体制を愛し、現在、未来を通じて国家に対する義務を実行できる人物としていくこと」と(SVS [2009b: 4]), 1994年のカリキュラムの路線に沿った事柄が書かれている。実際の内容に関しても、たとえば「集団の財産」としてかつては救国米蔵がとり上げられていたのが、ここでは学校や病院などの公共施設、川や森林、道路など、政治イデオロギーに関係のない世界中どここの国家にもあてはまる公共の財産ともいえるものがあげられている(SVS [2009c: 34-35])。また、小学校3年では「他人の権利を尊重する」といった、集団主義が強調された時代の教科書には存在しなかった課も含まれている。こうしたことからみると、クンスムバットが復活しても国民国家建設の重視という党の路線は基本的には変化していないように思われる。

しかしながら、やはり1994年の新カリキュラムで道徳の継承科目とされた「私たちの周りの世界」に追加する形で「クンスムバット」が復活したことの意味を軽視してはならないだろう。新カリキュラムによって「私たちの周りの世界」が導入されて以降、その総合科目的な性格から、小学校レベルの道徳教育で理想的な国民のモデルを示すような教育内容は実質的に削減されたといってよい。「クンスムバット」を復活させた背景には、近年、経済発展が進むにつれ、ラオスがめまぐるしい変化にさらされるなか「私たちの周りの世界」だけではもはや党の理想とする国民像を伝えきれないとの判断があったのではないだろうか。社会主義諸国の大半が崩壊し、自らの市場経済化がもう後戻りのできない地点まで進行したと思われる現在、ラオスが再び「正統派」の社会主義体制建設に向かう可能性はきわめて低いであろう。しかし、10・20カ年の教育戦略や改正教育法に「社会主義」の語を登場させ、クンスムバットを導入したことからは、急激な社会変化のなかでなんとかして「社会主義」の看板を掲げ、党の一党支配を維持していこうとする強い焦りが感じられる。

おわりに

本章では、1975年以降の道德教育と理想とされる国民像の変化から、ラオス人民民主共和国の国民形成について考察を行ってきた。建国当初、党の教育政策は「社会主義的な新しい人間」の育成を目標に、社会主義国家建設という至上命題に従属する形で進められていた。クンソムバット教科書では学習と労働の関係を示し、それらをとおして社会主義国家建設へと参加することこそが愛国的であるという構図が示された。そして生徒たちの間に、国家建設の全過程を指導する党への感謝と信頼の念を醸成させるような内容となっていた。冷戦期のイデオロギー闘争と国内の政治的不安定が解消されないなか、スパイへの注意をうながすなど、教科書には準戦時体制的色彩が強く、私的・個人的な領域は否定され、ラオスという国家のもとにすべてを投げ出すことが美德とされていた。

1986年の第4回党大会は、こうした社会主義教育路線からの転換の契機となった。党大会において新経済管理メカニズムを中心とする改革路線が本格化すると同時に、「チンタナカーン・マイ」が提示されたことは、新しい経済政策を実施するにはそれを担う「新しい思考」をもつ人材が必要であるという、党の認識を示したものと見える。党大会で発表された5大戦略計画のなかに教育改革に関するものが含まれていたことから、そのことは明らかであろう。そして党大会を起点に教育改革に向けた動きが開始され、1991年に憲法が公布されると、従来の「社会主義的な新しい人間」に代わり「善良な公民」が新しい人材育成の目標として登場する。この背景には、党の国家建設における重点が社会主義国家建設から国民国家建設へと移行したことを指摘することができ、このことは1994年の新カリキュラム後に編纂された教科書の内容からさらに明白なものとなる。

新教科書は法治国家の公民として必要とされる知識の習得と国民意識の醸成を目的とした課から構成され、クンソムバット教科書には登場することの

なかった仏教が国民の伝統的な文化として登場する。五戒や五善といった「シンタム」と呼ばれる仏教道徳が党と法律の本質とされ、ラオス国民の伝統文化の中心に仏教が据えられることとなった。このような宗教の強調は社会主義教育をめざす段階にあっては不可能なことであり、社会主義国家建設から国民国家建設へという国家建設目標の変化を象徴的に示すものといえる。教科書ではさらに、従来からいわれてきた「愛国心の遺産」に加え、「勤勉な労働と創意工夫の才という遺産」をもちだすことで、少数民族を含めたラオス国民の形成をさらに遠い過去へとさかのぼり、ラオス国民の存在を通時的に保証しようとする戦略もみられた。そして教育から社会主義色が薄れるなか、社会主義は次第に制度として建設されるものというよりも、むしろ政治スローガンのような存在へと変化していった。

こうして、国民統合の原理として社会主義国家建設という、かつての至上命題がその効力を完全に喪失しつつあるかにみえるなか、2001年の各教育戦略や2008年の改正教育法において「社会主義」の言葉が登場し、クソムバットが小学校教育で復活した。このことは教育の社会主義路線への若干の揺り戻しと捉えることができるかもしれない。しかしまた一方で、これをもって教育政策が1970年代の社会主義教育の時代へと回帰すると考えることはできないだろう。人々が日常生活のなかで集団労働や配給制などをおして社会主義と接していた時代とは異なり、現在のラオスにおいて少なくとも一般の人々の間で社会主義とはスローガンのような存在でしかない。それでもなお、党が社会主義を堅持するのは、めまぐるしく変わる社会状況のなか、党の一党支配を正当化し、安定的な支配を維持していくための戦略という意味合いが強い。

第1章でも述べられたように、現在、ラオスは著しい変化の波にさらされている。10年前にはエスカレーターも存在しなかったヴィエンチャンの街には大型のショッピングモールや高級ホテルが誕生し、携帯電話やインターネットの普及など人々の生活も一変している。このような著しい変化のなか、人々の価値観は多様化し、貧富の差も拡大してきている。さらに都市と農村

の格差も広がり、下手をすれば、人々の不満が現体制へと向かう可能性も少なからず生じている。そこでこのような状況を打破し、党の指導のもとに安定的な国民統合を進める切り札として持ち出されたのがスローガンとしての社会主義ということなのではないだろうか。もちろん、従来のような資本主義対社会主義という明確なイデオロギー対立が存在するわけではない。しかし、経済成長至上主義や物質主義など、「恥も外聞もない資本主義化」へとラオスが向かいつつあるかにみえるなか⁴⁴⁾、そうした動きへのアンチテーゼとして党は再び社会主義を提示しているように思われる。すなわち、従来は冷戦構造のなかで資本主義諸国との比較から新体制を正当化する手段であった社会主義が、今度はもっぱら対内的に自らの支配を安定させる手段として用いられるようになったのである。

このような戦略が今後いつまで継続していくのか、現時点で予測することは難しい。しかし格差拡大など市場経済化の進展にともなう弊害が生じつつある今、社会主義はそうした「負の側面」から人々の目をそらし、党の指導のもとに国民形成を進めていくための手段として、その重要性を増してきているかのように思われる。1970年代の社会主義国家建設の時代に逆戻りすることはないにせよ、2008年度以降、小学校レベルでクンソムバットが復活したのにはこうした事情が反映されていると考えられる。

[注]

- (1) 筆者は中間報告書(矢野 [2010])において“Phonlamueang”を「市民」と訳していた。しかし“Phonlamueang”の訳語として「国政や地方公共団体の公務に参加する権利と義務をもつ者」(デジタル大辞泉)の意をもつ「公民」の方が「市民」より適切であるとの判断から本章では「公民」を採用した。
- (2) ラオスの教育制度は初等教育5年、前・後期中等教育がそれぞれ3年ずつの計11年であった。後期中等学校は当初ウドムと呼ばれていたが、1998年にマッタニョム・パーイ(文字どおり後期中学校の意)に改められた(乾 [2004: 34])。1994年までの旧カリキュラムでクンソムバットが教えられていたのは中学2年までであったため、本章の分析は初等学校と前期中等学校までの範囲に限定して行うこととする。なお、2009年度より前期中等教育は4年に延

長されている。

- (3) ラオスの学年暦は9月から6月まで。したがって2008年度は2008年9月から2009年6月までとなる。
- (4) クンソムバットの科目名は1994年に新カリキュラムが導入されると学校教育からいったん姿を消す。詳しくは第2節の3を参照のこと。
- (5) 資料によっては「国防」と「社会主義建設」となっているものがある。
- (6) 建国に先立ち、1974年の第2回全解放区教育大会において、すでに「教育を最優先に」というスローガンが掲げられていた。
- (7) ベトナムでは1960年代後半に中国モデルから距離を置くなかで、「技術革命」を要として高度の合理性をもった組織に人々を編成することによって「主観的能動性」（遅れた経済的条件のなかで社会主義革命を行うのに必要なもの、要はやる気）を発揮するというモデルを追及するようになり、このような考えにもとづく「集団的主人公制」という概念がベトナム・モデルとして提唱されるようになった（古田 [1995: 174]）。
- (8) たとえば古田は、ベトナムにおいて普遍的な社会主義モデルが、抗米救国という課題への忠誠心＝愛国心と独自の歴史像やベトナム語への言語ナショナリズムなどの国民国家的な統合原理が強調されるなかで定着するという、逆説的な現象がみられたとする（古田 [1995: 175]）。
- (9) かつて小学校に入学するためには、年齢のほか、手を上にあげそれが頭のとっぺんを経て反対側の耳に届くかどうかという基準があった。教育科学研究所のアムパー先生によると、年齢に達していたが手が届かずに入学できなかった子供が準備学級に入ったということである（2009年8月18日のインタビュー）。ただ、ほかのラオス人に聞くと必ずしも一致した見解はなく、幼稚園のない地域で小学校就学前の児童が預けられた学級だという人もいた。またこの教科書は1969年にラオス愛国戦線中央教育局から出されたものとはほぼ同一内容である。1969年版では教育目標が「ラオス人民革命党への感謝と信頼」ではなく、「ラオス愛国戦線への感謝と信頼」となっていた（NLHS [1969: 3]）。
- (10) これは1971年発行の「中学1年」とほぼ同一内容である（NLHS [1971b]）。
- (11) 内戦期よりパテート・ラオ側では人々に「救国米」として米を供出させていた。救国米蔵とは供出米を備蓄していた米蔵のことである。
- (12) たとえば1967年発行のプーミー・ウォンウィチットの『ラオ語文法』前文にも同様の内容がみられる（Phumi [1967]）。
- (13) ラオ・トゥン（中高地ラオ）とは、ラオ・ルム（低地ラオ）、ラオ・スーン（高地ラオ）とともにラオスの民族を居住地別に3分割した際の呼称で、モン・クメール系の人々があてはまる。現在、公式には3分割による呼称は廃止されているが、民間レベルでの使用は依然としてみられる。

- (14) 1978年発行の小学準備学級教科書第29課「指導者を愛する」では、「私はあのおじさんが来た日を覚えています。スパヌウォンおじさんが私たちの集会室にやって来ました。拍手で迎えると、おじさんは手をあげて私たちに応えました。歓声がどっと湧き起こりました」ではじまる詞が掲載されていた(KSKT [1978a: 57-58])。
- (15) これは1987年6月6日から9日にかけて、閣僚議会と合同で実施された第4期党中央執行委員会第4回総会におけるカイソーンの見解の一部である。この会議でカイソーンは現在から2000年までの教育戦略についての基本的見解、指導的思想そして教育戦略の基本的指針と任務について述べている(Kasuang Sueksaa [1987: k-kh1])。
- (16) 教科書のなかで「われわれの党の新時代における教育戦略目標」として記されていた。1987年の教育戦略と内容を比較すると、「社会主義」という言葉が言い換えられている以外は同一内容であったため、1987年の教育戦略を党の教育戦略目標として紹介していたものと考えられる。
- (17) 『ラオス人民民主共和国の25年の業績と今後20年の教育戦略』というタイトルの冊子で、内戦期からの教育史と2001年以降の教育戦略について紹介したものである。
- (18) 前文にはページ数が打たれていない。引用箇所は前文の2ページ目にあたる。
- (19) ベトナムでも1991年7月の共産党第7回党大会において、ベトナムの政治体制が「プロレタリア独裁」であるとする従来の規定を改め、「人民の人民による人民のための国家」という再規定を行っている(中野 [1995a: 283])。ラオスの憲法もこうしたベトナムの動きと歩を合わせたものと推測される。
- (20) 前文の2ページ目にあたる。
- (21) 参政権、教育を受ける権利、労働の権利などの社会権を中心に規定され、自由権に関しては思想の自由、言論表現の自由などが法律の範囲内で保障されているにすぎないという限定性をともなう(金子 [2002: 3])。
- (22) ベトナムにおいても、この時期、国際社会への対応のため人権問題に関する議論が活発化していた(中野 [1995a, 1995b])。また、東欧のラオス人留学生の間で民主化要求のデモが起きたり、党内部にも民主化を求める動きが存在した。
- (23) 本章第1節の4「愛国心」で引用した中学2年第5課「故郷を愛する」のなかにも「善良な公民」という表現がみられた。しかし、この時点での育成目標は「社会主義的な新しい人間」であり、引用箇所でも「善良な公民となるために、勤勉に学習し、労働し、実践する」と憲法とは異なる文脈で用いられていた。
- (24) 第3節の2でみるように道徳にあたるラオ語には「クンソムバット」のほ

か「シンタム」という言葉がある。本章では、教科名にはクソムバットが使われていたことを明示する目的で道徳教科書を「クソムバット教科書」としてきた。しかし、「私たちの周りの世界」「公民教育」ではラオ語のタイトルが長く、またクソムバットのように同義語がほかに登場することもないため、日本語名を用いることにする。

- (25) ここでの道徳も科目名と同じ「クソムバット」という言葉が使われていた。この「クソムバット」は道徳科目ではなく、道徳（クソムバット）、知識、労働、肉体、芸術の5分野において発達した人間の育成をめざすという、教育全体の目標の一部である。実際、社会主義諸国のなかにはかつてのモンゴル人民民主共和国のように「道徳」の独立科目を設けず、各個別教科のなかに道徳教育の要素をとり入れ、教育全体をとおして道徳教育を行うような国家も存在した（Bayasgalan [2008]）。5分野のなかに「道徳」が含まれていることから、ラオスにおいても科目としての「クソムバット」だけではなく、教育全体をとおして道徳教育を行う方針がとられていたといえることができる。
- (26) この箇所の全訳は拙稿を参照されたい（矢野 [2010: 200]）。
- (27) 道徳以外の分野に関しては（矢野 [2010: 208-210]）に全訳を掲載している。
- (28) たとえば、革命後、通例の肯定の返答に用いる「チャオ」に対して、目上のものに用いる敬語表現である「ドーイ」が階級社会の象徴であるとして使用が禁じられていた時期があった（Enfield [1999: 274]）。
- (29) 中学2年教科書の第I章「環境」は環境を自然環境と社会・文化環境に分けて構成されている。
- (30) 原文はタムマ・ハーとなっており、おそらく仏教語で「五戒」をよく守ることを意味する「五善」を指しているものと思われる。
- (31) クソムバットの「ソムバット」はもともと財産や所有する金品を意味する。クソムバットのほか、類似語にフープソムバット（外形のよさ、美貌）、サップソムバット（経済的な財産）がある。その意味で、仏教的な道徳であるシンタムに対してクソムバットは世俗的な道徳と考えられるのかもしれない。プーミー・ウォンウィットも『新しい道徳と革命道徳』のほかの個所でクソムバットを個人に内在する善で進歩的な両親から生じたもの、シンタムを個人に内在する善で他人あるいは何かの宗教から得られたもの、シンタム・パティワットをマルクス・レーニン理論を学んだ人のなかに生じる最善の思考としている（Phumi [1995: 7]）。
- (32) このほか、ディミトロフ、金日成、劉少奇の名前があげられている。プーミーは「革命道徳」の中心は、勤勉に正しい仕事を行う、物質・労力・時間を厳格に節約する、欲張らず、足るを知る、正義すなわち善悪を知る、など

- にあるとする。プーミーはこれらを道徳（クンソムバット）そして革命道徳（シンタム・パティワット）と呼ぶと結んでおり、この2つの語を厳格には区別していない（Phumi [1995: kh1-kh2]）。
- (33) 『後漢書』など中国の歴史書に西南夷のひとつとして「哀牢」（アイラオ）が登場する（スチュアート・フォックス [2010: 17-18]）。現実のラオ族の祖先かどうかは疑わしいとされるが、ラオスではしばしばラオ族の祖先として言及されてきた。
- (34) 第2課「ラオス国民の歴史」は、「古代のラオス国民」「ランサーン統一王朝の時代のラオス国民」「フランス植民地支配下のラオス国民」「民族民主主義革命の時代のラオス国民」「国家建設の時代のラオス国民」の5つに時代区分がなされている。
- (35) チャオファー・バッチャイは1919年から1921年ごろまでラオス北東部各地で反乱を起こしたモン族のリーダー。オンケオは自らを「プー・ミー・ブン」（聖なる人）であると宣したアラク族（ラオ・トゥン）のリーダー。1901年ごろより南部ボラウェン高原を中心に反乱を起こした。コマダムも同じラオ・トゥンのニャーフン族で、オンケオの部下。自らの反乱軍も率いていた。ポー・カドオウアトはサワンナケートのラオ・ルムの間で支持を得ていた（スチュアート・フォックス [2010: 17-18]）。
- (36) 第3課「ラオス国民の美しい遺産」のなかで「高い愛国心」「一致団結と友好」「勤勉な労働と創意工夫の才」をラオス国民の3大遺産としてあげている。
- (37) このほかには、言語、文字、文学、踊りの様式、カップラムと呼ばれる民謡があげられている。これらに関して、第5課「法律、言語、芸術文学における文化」のなかで、言語と文字に関してはもっぱらラオ語、ラオ文字のみに言及されるのに対し、踊りやカップラムについては少数民族のものにも言及されるなどの差がみられる。
- (38) タート・ルアンもワット・シェントーンもランサーン王国時代にラオ族によって建造された仏教寺院である。
- (39) ワット・プーはラオス南部のチャンパーサク県にあるクメール人の遺跡。世界遺産に登録されている。
- (40) 内戦期にはラオ・トゥン、ラオ・スーンの言語の発展を誹り、モン語表記が作成されたり、教科書が編纂されたこともあった。しかし、1975年以降教育はすべてラオ語のみで行われるようになり、少数民族語への配慮はむしろ内戦期よりも低下したといえる状況が続いていた。そうしたなか、近年ラオス国営テレビ放送でモン語とクム語のニュース番組が放送されるなどの変化の兆しもみられている。
- (41) この場合「正当性」とは党の支配が承認され、許容される根拠の意。一方

「正統派」とは社会主義の理想型の意で用いている。

- (42) 環境保護は「私たちの周りの世界」の教科書ではみられたが、従来の「クンソムバット」教科書にはそれを独立テーマとする課はみられなかった。
- (43) このうち「指導者を尊敬する」では、スバヌウォンとともにカイソーンが写真入りで登場するようになった (SVS [2009a: 22])。
- (44) 塩川は古田元夫の『ドイモイの誕生——ベトナムにおける改革路線の形成過程——』青木書店 (2009年) の書評のなかで、改革に失敗した後の旧社会主義諸国におとずれたのは「恥も外聞もない資本主義化」であったとしている (塩川 [2010: 10])。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 乾美紀 [2004] 『ラオス少数民族の教育問題』明石書店。
- 金子由芳 [2002] 『ラオスの経済関連法制の現状と協力の焦点』国際協力事業団国際協力総合研究所。
- 菊池陽子 [2010] 「第38章 質素・儉約は美德——社会主義政権下の仏教——」 (菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編『ラオスを知るための60章』明石書店 220-224ページ)。
- 栗原浩英 [1988] 「ベトナム労働党の文芸政策転換過程 [1956~58年] ——社会主義化の中の作家・知識人——」 (『アジア・アフリカ言語文化研究』第36号 9月 1-26ページ)。
- [2010] 「ベトナムの社会主義——制度としての社会主義から理念としての社会主義へ——」 (メトロポリタン史学会編『いま社会主義を考える——歴史からの眼差し——』桜井書店 203-237ページ)。
- 塩川伸明 [2010] 「読書ノート：古田元夫『ドイモイの誕生』」 (<http://www.shiokawa.j.u-tokyo.ac.jp/ongoing/books/furuta-p.pdf> 2011年1月15日アクセス)。
- スチュアート・フォックス, マーチン [2010] 菊池陽子訳『ラオス史』めこん。
- 出口真弓 [2003] 「ベトナムの道德教育カリキュラムの分析」 (『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第52号 115-122ページ)。
- 中野亜里 [1995a] 「ベトナムの対外関係と人権問題——「人権」と「民主化」をめぐる国内の論評を中心に——」 (『法学研究』第68巻第11号 11月 277-300ページ)。
- [1995b] 「ヴェトナムの [全方位外交] と人権論の発展——外圧への対抗か

- ら積極的対話へ——」（『アジア研究』第42巻第1号 12月 71-98ページ）。
- 古田元夫 [1995] 『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ——』 東京大学出版会。
- [2009] 『ドイモイの誕生——ベトナムにおける改革路線の形成過程——』 青木書店。
- 矢野順子 [2007] 「『ラオス国民』の形成と『武器』としてのラーオ語——パタート・ラーオの教育政策とプロパガンダを中心として——」（『東南アジア歴史と文化』第36号 3月 3-35ページ）。
- [2010] 「ラオス人民民主共和国における道徳教育——『社会主義的新しい人』から『良い市民』へ——」（山田紀彦編「ラオス チンタナカーン・マイ（新思考）政策の新展開」アジア経済研究所 調査研究報告書 195-224ページ）。
- 山田紀彦 [2005] 「市場経済移行下のラオス人民革命党支配の正当性——党政治・理論誌『アルン・マイ』における議論の変遷を中心に——」（天川直子・山田紀彦編『ラオス 一党支配体制下の市場経済化』アジア経済研究所 27-70ページ）。
- Bayasgalan Oyuntsetseg [2008] 「モンゴル人民共和国における道徳教育の展開——1921年～1980年代末までの動向を中心に——」（『教育学雑誌』第43号 3月 35-51ページ）。

<ラオス語文献>

- Bunsoen Saengmani and Chan Phunsavat eds. [2002] *Phongaan 25 Pii [1975-2000] Lae Nyutthasaat Kaan Sueksaa 20 Pii [2001-2020] Khoong Soo Poo Poo Lao* [ラオス人民民主共和国の25年の業績と今後20年の教育戦略], Vientiane: Visaahakit Hoonphim Sueksaa.
- Kasuang Sueksaa (教育省) [1987] *Nyutthasaat Kaan Sueksaa Samlap Lainya Tae Nii Thoeng Pii 2000* [現在から2000年までの教育戦略], Vientiane.
- Kasuang Sueksaa Lae Kilaa (教育・スポーツ省) [1991] *Chutmaai Lae Phaenkaan Koosaang Hoonghian Saaman Sueksaa Nai Soo Poo Poo Lao* [ラオス人民民主共和国における普通教育学校建設の目的と計画], Vientiane.
- Kasuang Sueksaathikaan (教育省) [2008] *Phaen Nyutthasat Kaan Patihuuup Laboop Kaan Sueksaa Haeng Saat 2006-2015* [国民教育制度改革戦略計画 2006-2015年], Vientiane.
- Kaysone Phomvihane [1974] *Saapsuem Naeo Thaang Kaan Sueksaa Khoong Phak, Tangnaa Khanyaai Phaalkit Kaan Sueksaa* [党の教育指針通達, 教育事業の精力的拡大], Sam Neua: Hoong Phim Mittaphaap Lao-Chin khoong Suunkaang Naeo Lao Hak Saat.

- [1979a] *Mati Khoong Kom Kaan Mueang Suunkaang Phak Pasaason Pativat Lao Kiaokap Viakgaan Sueksaa Nai Lainyamaï Khoong Kaan Pativat* [革命の新時代における教育事業についてのラオス人民革命党中央政治局決議], Vientiane: Khana Bolihaangaan Suunkaang Phak Pasaason Pativat Lao.
- [1979b] *Detdiao Namao Kaan Sueksaa Pai Koon Kao Nueng* [教育を最優先に], Vientiane: Hoong Phim Kasuang Sueksaa, Kilaa Lae Thammakaan.
- [1986] *Bot Laaigaan Kaan Mueang Khoong Khana Bolihaangaan Suunkaang Phak Pasaason Pativat Lao Too Koongpasum Nyai Khangthii 4 Khoong Phak* [第4回党大会ラオス人民革命党中央執行委員会政治報告書], Vientiane.
- Khammi Buasaengthong [1994] “Kaan Sueksaa Lainya Vanthii 2-12-1975 thoeng 1985” [1975年12月2日から1985年までの教育], in *Pavat Kaan Sueksaa Lao* [ラオス教育史], Vientiane: Phanaek Sueksaasaat-Chitvithanyaa Mahaavithanyaaalai Saangkhue Viang Chan, pp. 101-118.
- Lao People’s Revolutionary Party (LPRP) [1972] *Khoongkaan Kaan Mueang* [政治綱領].
- Phumi Vongvichit [1967] *Vainyakoon Lao* [ラオ語文法], Sam Neua: Phanaek Sueksaa Suunkaang.
- [1995] *Khunsombat Mai Lae Sintham Pativat* [新しい道徳と革命道徳], Vientiane: Hoong Phim Haeng Lat.
- Saenggoen Vainyakon [2007] “Bot Laaigaan Sonthanaa Laekpian Daan Vithanyasaat: Lakkaan Lae Boonning Nai Kaan Saang Laksuut Visaa Khunsombat (San Pathom) Lae Visaa Sueksaaphonlamueang (San Matthanyom Toon Ton Lae Paai)” [学術的意見交換のためのレポート：小・前後期中等学校の道徳カリキュラム編纂における原則と根拠] (未刊行内部資料).
- Sathaaban Khonkhwaï Vithanyasaat Kaan Sueksaa (SVS, 教育科学研究所) [1998] *Laksuut San Pathom Saaman Sueksaa* [普通初等学級カリキュラム], Vientiane: Kasuang Sueksaathikaan.
- [2003] *Eekasaan Samlap Koong Pasum Sammanaa Kiaokap Kaan Patihuup Laksuut San Matthanyom Toon Paai* [後期中等教育カリキュラム改革についての会議資料], Vientiane: Kasuang Sueksaathikaan
- Sueksaa Suunkaang (中央教育局) [1964] *Laksuut Kaan Soon San Pathom Sueksaa* [小学校カリキュラム], Sam Neua: Phanaek Sueksaa Suunkaang.

法律・憲法

- JICA [2004] *Puem Luap Luam Kotmaai Lao* [法律集], JICA.
- [2008] *Kotmaai Vaaduai Kaan Sueksaa Haeng Saathaalanat Pasaatipathai Pasaason Lao (Sabap Pappung)* [ラオス人民民主共和国教育法 (改訂版)],

Vientiane: PESL.

Saphaa Haeng Saat (国民議会) [2003] *Latthathammanuun Haeng Saathaalanalat Pasaathipatai Pasaason Lao* [ラオス人民民主共和国憲法], Vientiane: Hoong Phim Haeng Lat.

Saphaa Pasaason Suungsut (最高人民議会) [1991] *Latthathammanuun Haeng Saathaalanalat Pasaathipatai Pasaason Lao* [ラオス人民民主共和国憲法], Vientiane: Hoong Phim Haeng Lat.

教科書

(ラオス愛国戦線)

Hoong Kaan Sueksaa Suunkang Naeo Lao Hak Saat (NLHS, ラオス愛国戦線) [1969] *Khunsombat P1* [道德小学1年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

— [1970a] *Khunsombat Hoong P2* [道德小学2年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

— [1970b] *Khunsombat Hoong P4* [道德小学4年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

— [1971a] *Khunsombat Hoong P3* [道德小学3年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

— [1971b] *Khunsombat Matthanyom 1* [道德中学1年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

— [1971c] *Khunsombat Matthanyom2* [道德中学2年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

— [1972] *Khunsombat Hoong P4* [道德小学5年], Sam Neua: Hoong Phim Suunkang Naeo Lao Hak Saat.

(ラオス人民民主共和国)

Kasuang Sueksaa, Kilaa lae Thammakaan (KSKT, 教育・スポーツ・宗教省) [1976] *Khunsombat Saaman Sueksa Matthanyom 1* [道德中学1年], Vientiane: Hoong Phim Kasuang Sueksaa, Kilaa Lae Thammakaan.

— [1977] *Khunsombat Matthanyom 2* [道德中学2年], Vientiane: Hoong Phim Kasuang Sueksaa, Kilaa lae Thammakaan.

— [1978a] *Khunsombat Hoong Kiam* [道德準備学級], Soviet Union.

— [1978b] *Khunsombat San Pathom Piithii 1* [道德小学1年], Soviet Union.

— [1979a] *Khunsombat San Pathom Piithii 4* [道德小学4年], Soviet Union.

— [1979b] *Khunsombat San Pathom Piithii 5* [道德小学5年], Soviet Union.

— [1979c] *Visaa Kaan Mueang Udom 1* [政治高校1年], Vientiane.

- [1979d] *Visaa Kaan Mueang Udom 2* [政治高校2年], Vientiane.
- [1979e] *Visaa Kaan Mueang Udom 3* [政治高校3年], Vientiane.
- [198?a] *Khunsombat San Pathom Piithii 4* [道德小学4年], Vientiane: Visaahakit Kaan Phim Chamnaai Sueksaa.
- [198?b] *Khunsombat San Pathom Piithii 5* [道德小学5年], Vientiane: Visaahakit Kaan Phim Chamnaai Sueksaa.
- Sathaaban Khonkhwa Vithanyasaat Kaan Sueksaa (SVS, 教育科学研究所) [1996a] *Baep Hian Vithanyasaat Sangkhom San Matthanyom Piithii 1* [社会科学中学1年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [1996b] *Khuumue Khuu Vithanyasaat Sangkhom Matthanyom Piithii 1* [社会科学中学1年教師手引き], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [1997a] *Baep Hian Look Oomtua Hao San Pathom Piithii 4* [私たちの周りの世界小学4年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [1997b] *Baep Hian Look Oomtua Hao San Pathom Piithii 5* [私たちの周りの世界小学5年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [1997c] *Khuumue Khuu Look Oomtua Hao San Pathom Piithii 4* [私たちの周りの世界小学4年教師手引き], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [1997d] *Baep Hian Vithanyasaat Sangkhom San Matthanyom Piithii 2* [社会科学中学2年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [1997e] *Baep Hian Vithanyasaat Sangkhom San Matthanyom Piithii 3* [社会科学中学3年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2003a] *Baep Hian Visaa Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 1* [私たちの周りの世界小学1年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2003b] *Baep Hian Visaa Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 2* [私たちの周りの世界小学2年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2003c] *Baep Hian Visaa Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 3* [私たちの周りの世界小学3年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2007a] *Baep Hian Khunsombatsueksaa Lae Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 1* [道徳と私たちのまわりの世界小学1年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2007b] *Khuumue Khuu Khunsombat San Pathom Sueksaa Piithii 1* [道德小学1年教師用手引き書], Hanoi: Nhan Dan Printing House.
- [2007c] *Baephian Khunsombatsueksaa Lae Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 2* [道徳と私たちのまわりの世界小学2年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2007d] *Khuumue Khuu Khunsombat San Pathom Sueksaa Piithii 2* [道德小学2年教師用手引き書], Hanoi: Nhan Dan Printing House.

- [2008] *Baephian Sueksaa Phonlamueang San Matthanyom Sueksaa Piithii 5* [公民教育中学5年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2009a] *Baephian Khunsombatsueksaa Lae Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 3* [道德と私たちのまわりの世界小学3年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2009b] *Khuumue Khuu Khunsombat San Pathom Sueksaa Piithii 3* [道德小学3年教師用手引き書], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2009c] *Baephian Khunsombatsueksaa Lae Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 4* [道德と私たちのまわりの世界小学4年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2009d] *Khuumue Khuu Khunsombat San Pathom Sueksaa Piithii 4* [道德小学4年教師用手引き書], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2009e] *Baephian Sueksaa Phonlamueang San Matthanyom Sueksaa Piithii 4* [公民教育中学4年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2009f] *Baephian Sueksaa Phonlamueang San Matthanyom Sueksaa Piithii 6* [公民教育中学6年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.
- [2010] *Baephian Khunsombatsueksaa Lae Look Oom Tua Hao San Pathom Sueksaa Piithii 5* [道德と私たちのまわりの世界小学5年], Vientiane: Visaahakit Hoong Phim Sueksaa.

<英語文献>

- Cheung, Kwok Wah, and Suyan Pan [2006] “Transition of Moral Education in China: Towards Regulated Individualism,” *Citizenship Teaching and Learning*, Vol. 2, No. 2, December, pp. 37-50.
- Clayton, Thomas [2005] “Re-orientations in Moral Education in Cambodia since 1975,” *Journal of Moral Education*, Vol. 34, No. 4, December, pp. 505-517.
- Doan, Dung Hue [2005] “Moral Education or Political Education in the Vietnamese Educational System?” *Journal of Moral Education*, Vol. 34, No. 4, December, pp. 451-463.
- Enfield, N. J. [1999] “Lao as a National Language,” in Grant Evans ed., *Laos: Culture and Society*, Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 258-290.
- Evans, Grant [1998] *The Politics of Ritual and Remembrance Laos since 1975*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Langer, Paul F. [1971] *Education in the Communist Zone of Laos*, Santa Monica: Rand Corporation.
- Lee, Wing On, and Chi Hang Ho [2005] “Ideopolitical Shifts and Changes in Moral Education Policy in China,” *Journal of Moral Education*, Vol. 34, No. 4, Decem-

- ber, pp. 413-431.
- Morgan, W. Hohn [2005] "Marxism and Moral Education," *Journal of Moral Education*, Vol. 34, No. 4, December, pp. 391-398.
- Nuannavong, Onekeo [2008] *Comparative Study on Korean and Lao Curricula for Secondary Education*, Seoul.
- Stuart-Fox, Martin [1997] *A History of Laos*, Cambridge: Cambridge University Press
(菊池陽子訳『ラオス史』めこん 2010年)
- [2001] *Historical Dictionary of Laos*, 2nd ed., Lanham and London: Scarecrow Press.